講演会「生命を夢見て：ウクライナと共に」で知る故郷への思い

学報委員　田丸 萌夕希

ウクライナ出身の現代美術作家ヴィクトリア・ソロチンスキーさんによる講演会「生命を夢見て：ウクライナと共に」が5月13日、本学オーロラホールで開かれた。ロシアに侵攻されたウクライナへのチャリティ活動と個展のため来日したソロチンスキーさんが、日本の若者に話がしたいと、この講演会が開催された。本学の学生・教職員やテンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ)の学生、一般の方たち約150人が参加した。

故郷ウクライナは今

ソロチンスキーさんは旧ソ連時代にマリウポリに生まれた。イスラエル、カナダへ移住し、美術修士号をニューヨークで取得。現在はドイツ・ベルリンを拠点として数々のプロジェクトを手掛けている。

ロシア侵攻前のウクライナの街と侵攻後の様子を比較し「起きている事が信じられなくて、感情的な気持ちになる」と時折涙を見せながら話した。ウクライナのマリウポリでは、講演時にはなお激しい戦いが続いていた。起きていることの重大さを改めて感じた。

家族との繋がり

ウクライナは旧ソビエト連邦の時代に厳しい弾圧を受け、過酷な大飢餓で多くの人々が命を落とした。ソロチンスキーさんの曽祖父母は正義を求めて闘い、曽祖父は獄死したという。曽祖母も投獄されたが、大飢餓を生き抜いた。家族が歩んだ道はそのままウクライナの歴史を語っていた。

家族の中でソロチンスキーさんが最も影響を受けたのは、祖父だった。祖父は、タレント、アーティスト、俳優、舞台監督、写真家として活躍し、たくさんの顔を持っていた。ソロチンスキーさんが、アートを作る手段として写真を選んだのもその影響で、暗い現像部屋で一緒に過ごした事が１番の思い出として記憶に残っているという。

作品に込めた故郷への思い

講演会の後半では、チャリティ個展「生命を夢見て：ウクライナと共に」に出展した作品を中心に紹介した。2009年から撮影が続いている「Lands of No-Return(帰らざる国)」はソロチンスキーさんの祖母を思い出させる。このプロジェクトは、過去に対する敬意を示すために企画され、祖父母が住んでいた限界集落で暮らす高齢者を撮影した。何も手を加えず、自然や生活の様子、人々をそのまま撮影した。結婚生活70年以上の90歳夫婦の写真が目を惹いた。ウクライナの象徴でもある、老夫婦の情熱や愛がそこにあると語った。

「The Space Between(あいだの空間)」という作品は、７枚の自身のポートレート写真で構成されている。ソロチンスキーさん本人の記憶とウクライナの自然が融合した作品になっている。異なる文化を持つ人々をつなぐ架け橋として、この作品を撮ったという。

ソロチンスキーさんの作品の中で最も印象的だったのは、「歌」だった。実際には存在しない言語で歌詞は作られ、音は即興で11分作曲したという。一部を実際に聞いてみると、歌詞はなく、意味はわからないが、心の奥底へと響いた。

日本で行われた個展に合わせて、新しくもう1曲歌を作ったそうだ。ソロチンスキーさんの作品では、家族、ウクライナでの生活、子供の時の記憶がよく見受けられる。異なる文化、価値観、言語、バックグラウンドを持つ人たちを、作品によって繋げようという情熱に感銘を受けた。

科研費 KAKENHI　教員の研究

― 2022年度「科学研究費等助成事業」に採択された研究 ―

新規採択研究

基盤研究(C)
- 古英語作者不詳聖人伝作品群における女性像：テクストと言語の基礎的研究 ― 島﨑 里子 准教授
- 内モンゴルにおける現代モンゴル文学の文献学的研究― 1940年代を中心に ― 呼和巴 特爾 教授
- 日本人英語学習者の語彙学習モデル構築：基本動詞と定型表現ネットワーク化と意味拡張 ― 國分 有穂 准教授
- 「林彪事件」に関する実証的研究 ― ボルジギン 呼斯勒 教授
- 日本の「一つ屋根型グローバル大学キャンパス」の現状と展望―東アジアとの比較から ― シム チュン・キャット 准教授
- 正しい包丁操作を習得させるためにはファーストコンタクト以前をいかにすべきか ― 秋山 久美子 教授

ひらめき☆ときめきサイエンス
- 食品と病気の因果関係を探る -DOHaD研究？？って、どんな研究- ― 小西 香苗 准教授

若手研究
- 経営者の経営活動を支える補佐機能に関する研究 ― 伊勢坊 綾 特命講師
- 自然かつ快適に身体を動かすことのできる音楽の特徴解明と楽曲への具現化 ― 池上 真平 専任講師

継続研究

基盤研究(B)
- 放射光X線CTによる非破壊での日本刀の体系的研究：作刀技術解明にむけて ― 田中 眞奈子 准教授
- 外国人労働者の定着促進のための協働型受け入れ環境の構築 ― 近藤 彩 教授

基盤研究(C)
- 英語母語話者の物語コーパスに基づいた慣用句を中心とした絵本教材の作成と提供 ― 金子 朝子 特任教授
- レビー小体型認知症の鑑別に有用な心理検査バッテリーの検討 ― 村山 憲男 准教授
- 20世紀の日本・イタリア・バチカンにおける民間所在資料や地方公文書の管理 ― 湯上 良 准教授
- 診療・介護・障害報酬に横断的かつ統合的な財務情報および非財務情報に関する調査研究 ― 井出 健治郎 教授
- 戦後日本における世俗の慰霊空間の研究 ― 戸田 穣 専任講師
- 谷文晁―門の研究 -江戸後期の文人社会における交流を軸として- ― 鶴岡 明美 准教授
- 古・中英語期における女性聖人伝の系譜研究：Aelfricのテクストと言語を中心に ― 島﨑 里子 准教授
- 日本人大学生英語学習者への会話指導における協働創作文活動を統合した教育法の提案 ― 竹田 らら 特命准教授
- 教材開発を目指した高齢者介護施設における新人介護人材育成のプロセスの実態調査 ― 大場 美和子 准教授
- 「越境による共創」で創出する中等教育カリキュラム・オープンイノベーションの探求 ― 緩利 誠 准教授
- 基礎的な包丁操作スキルを習得させるためのバイオメカニクスの根拠と教示方法の明確化 ― 秋山 久美子 教授
- 自閉症スペクトラムの対人社会性の解明 -主題統覚検査の物語反応と視覚運動から- ― 田中 奈緒子 教授
- 近代初期日本における美術・文化愛好者の再生産過程 -学校外での教習活動に着目して- ― 早川 陽 准教授
- 日本手話における複合述部の統語分析 ― 浅田 裕子 准教授
- 知的障害者の中長期のキャリア形成が企業活動にもたらす効果 ― 根本 治代 准教授
- 中小食品製造企業における営業担当者の人材育成に関する研究 ― 清野 誠喜 教授
- DOHaD概念に基づく次世代を担う女性の出生体重とその後の体格 ― 小西 香苗 准教授
- 食品中のニトロ化トリプトファン生成が生体へ及ぼす影響の解析 ― 川崎 広明 専任講師
- 近代移行期、蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究 ― 三野 行徳 専任講師
- 我が国の小・中学校におけるSTEM教育普及に向けたプログラム開発と人材育成 ― 白數 哲久 准教授
- 言語マイノリティの医療保障のための患者の権利に関する比較法的研究 ― 森本 直子 准教授
- 地域コミュニティとデジタル技術を基盤とした児童学習センター開発に関する実践的研究 ― 森 秀樹 准教授
- MMSEを用いたレビー小体型認知症の簡易鑑別法：高齢者に負担をかけない新しい評価 ― 村山 憲男 准教授
- グルタミン酸回収機構を調節する神経細胞とアストロサイトのクロストーク ― 林 真理子 准教授
- 快楽性食欲との関係性からみた抑制機能の操作による摂食行動の変容可能性 ― 山中 健太郎 教授
- 食事栄養因子に基づくアラキドン酸代謝経路における統合オミクス解析法の確立 ― 花香 博美 教授
- 地域コミュニティに基づくメディア・デザイン実践の方法論に関する研究 ― 鳥海 希世子 専任講師
- 川端文学におけるアダプテーションの考察―活字から舞台・映像への翻案 ― 福田 淳子 教授
- 多言語多文化社会構築に向けた高大接続のスペイン語教育 ― 小倉 麻由子 特命講師
- 乳児保育の質向上を支える対話型園内研修の検討：「食」を通した包括的な園理解から ― 遠藤 純子 准教授
- 「疲労感」軽減効果のある食品成分は「疲労そのもの」を軽減しているのか？ ― 渡辺 睦行 准教授

研究活動スタート支援
- 模倣から再創造へ -ルネサンス期イタリアの工房制作とその後世までの批評・受容- ― 永井 裕子 専任講師

国際共同強化B
- 「チンギス・ハーンの長城」に関する国際共同研究基盤の創成 ― ボルジギン 呼斯勒 教授

若手研究
- 戦後日本における「若者」を社会問題化する言説のエスノメソドロジー研究 ― 小川 豊武 専任講師
- 貧困に起因する健康問題発症メカニズム解明とこども食堂を介した解決システム構築 ― 黒谷 佳代 専任講師
- グローバル時代におけるアジア系移住者のトランスナショナルな教育行動と都市空間 ― 申 知燕 専任講師
- イノベーションの支援者と企業家の利害対立発生メカニズム：利害の経時的変化への注目 ― 三浦 紗綾子 専任講師
- 19世紀プロイセンにおけるミュージアム政策の教育思想史的研究 ― 伊藤 敦広 専任講師
- 子育て家庭に対するソーシャル・サポートが保護者及び子どもに与える効果の検証 ― 野嵜 茉莉 専任講師
- 多様な情報社会の生成過程を描く：ブータンにおけるビデオゲーム普及を手がかりとして ― 藤原 整 特命講師

挑戦的研究(萌芽)
- 近現代アートの保存・継承に向けた収蔵品情報管理・共有システムの構築 ― 田中 眞奈子 准教授

第14回昭和女子大学女性文化研究賞（坂東眞理子基金）

男女共同参画社会の推進、女性文化研究の発展に寄与する本を顕彰する「第14回昭和女子大学女性文化研究賞（坂東眞理子基金）」が、慶應義塾大学名誉教授・鈴木正崇氏による『女人禁制の人類学：相撲・穢れ・ジェンダー』（法藏館）へ贈られました。この賞は、「世の中を変える力のある本を書くという作業を応援したい」と坂東理事長・総長の寄付で設立した坂東眞理子基金により運営されています。

受賞作は、2002年に山岳信仰などの女子禁制の伝統について著された『女人禁制』（吉川弘文館）の続編とも言うべき作品です。大相撲の土俵や大峯山山上ケ岳山麓に今も残る女人禁制の問題等を、第2波フェミニズム等の女性運動の進展やジェンダー論の国際的展開、社会の変化等をふまえつつ、文化人類学を中心に、民俗学、歴史学、宗教学等の学際的観点から取り上げて執筆されています。

「差別」と「伝統」の二者択一や男女二元論ではなく多様な選択肢があること、コロナ後の世界をも見通しつつ、「開かれた対話と議論を促す実践的試み」の書です。

秋桜祭 COSMOS FESTIVAL　11月12日(土)　13日(日)

【秋桜祭実行委員会 公式Instagram】
@s.cosmos_swu

学報委員会から

委員長　田丸萌夕希（英語コミュニケーション学科2年）

学報委員会では、取材や執筆活動を通じて、自分の知らなかった世界・新しい人との出会いを沢山得る事が出来ます。私たち「学生だからこそ」経験できること、人と人との繋がりを通じて得られるものを大切にして、今後も発信していきます。

【学報委員会】歴史ある大学新聞「昭和学報」を執筆する学生有志による委員会です。昭和学報を年2回発行するほか、記事を大学ホームページに掲載しています。

第632号　2022年9月1日
昭和女子大学
〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7-57
編集発行人　学校法人 昭和女子大学広報部

昭和學報
SHOWA GAKUHO

INDEX

ごあいさつ 1
キャンパスライフ 2 3
教養 4

進化しつづける 昭和女子大学

2022年5月20日、4人の学生がテンプル大学の学士号を得ました。昭和女子大学で3年間学び、テンプル大学で2年間学んで日米両大学の学士号を得るダブル・ディグリー・プログラム（DDP）1期生です。他の大学でも交換留学など海外の大学と協定を結び様々なプログラムを有していますが、現実に機能していないという話も聞く中で、昭和女子大学では確実に履修者を出しています。

昭和女子大学のグローバル教育は目標を掲げるだけでなく、結果を出しているのが大きな特徴です。中国の名門校上海交通大学とは51人、ソウル女子大学校から10人、DDP生を輩出しており、後輩も続いています。テンプル大学とはMiMという4年で学士号とMBAが取れるプログラムもスタートします。ボストンのキャンパスへも2021年10月から学生が留学を再開し、現在も多くの学生が学んでいます。

昭和女子大学はコロナ禍の中でもオンラインを活用し、教職員が力を合わせて学生の学ぶ機会を確保してきました。グローバル教育だけではなく、幅広い教養と実務実学に関わる専門知識、スキルの習得にも力を入れています。伝統ある学察研修、文化研究講座、女性教養講座に加え、近年では企業や自治体とのプロジェクト活動が活発に行われ、就職活動の手厚い支援も評価されています。こうした丁寧な教育の結果、昭和女子大学の学生は入学後大きく伸びて、色々な分野で活躍し、新聞社主催のコンテストで最優秀賞を得るなど多くの入賞をはたしています。

大学で学んだ基礎能力のうえに社会に出た後も学び続けてほしいと、1年制の社会人向け大学院もスタートしました。

女性が長い人生をしっかり自立・自律して生きていける力をつける昭和女子大学で一緒に学びましょう。

理事長・総長
坂東 眞理子

1920年、創立者の人見東明は第一次世界大戦後の荒廃した世の中を平和な世界に変えることのできる「思慮ある力強き婦人」を育成するために、本学を創設しました。そして100年後の今、昭和女子大学は次世代社会を牽引する優れた女性の育成を目指して、建学の精神を受け継ぎつつ時代のニーズに応える教育を実践しています。

近年、「女性は世界を変える」というテーマで一連の国際シンポジウムを開催し、国内外で活躍している方々を迎えて女性のリーダーシップやジェンダー問題などについて議論してきました。現在の日本のジェンダーギャップ指数は116位/146国（2022年）という低さです。男女格差をなくすために重要なことは、女性たち自身がこのギャップを乗り越えて活躍の場を切り拓く意思と実力をもつことです。

本学では広い教養と専門分野の知識に加え、キャリア教育プログラムで自分の人生を設計する力を、留学やテンプル大学ジャパンキャンパス（TUJ）との交流プログラムを通じてグローバル社会に必要な国際感覚や語学力を修得します。全学対象のデータサイエンス科目は多くの学生が履修し情報社会に必須のデータリテラシーを学んでいます。また、プロジェクト型学修や様々な体験プログラムを通して社会人力を培います。

これまでに60人以上の学生がTUJや中国、韓国の協定大学とのダブル・ディグリー・プログラムで本学と留学先の両方の学位を取得しました。大学院では、昨年度から社会人のスキルアップのために福祉社会研究、生活文化研究、言語教育・コミュニケーションの各専攻で1年制コースが始まりました。本学の大学、大学院で、学生がそれぞれの夢を実現し次世代社会で活躍するための力とスキルを身につけることを願っています。

学 長
小原 奈津子

自分の限界に挑戦し 激動の時代を生き抜く力を養います

国際学部では、全学生が昭和ボストンや世界各国の協定校で半年から2年の留学生活を送ります。4大学のダブルディグリー（上海交通大学、淑明女子大学校、テンプル大学、クイーンズランド大学）に加え、テンプル大学の修士号を取得できるMiM「3＋1」など多彩なプログラムを提供しています。先行きが不透明な世界情勢の中で、異文化を理解し地球規模の課題に挑戦する人材育成を目指します。

国際学部
国際学科
英語コミュニケーション学科
学部長 川畑 由美

グローバルに活躍できる 人材を育成

女性の活躍は日本経済における喫緊の課題となっています。女性がビジネスを開拓、変革する「ビジネスデザイン学科」ではボストン留学のほか、3つの専門領域で学びを深めます。高度な理論を学び、実践に活かす「会計ファイナンス学科」では在学中に簿記2級の資格取得を目指します。両学科ともプロジェクト型学修により自発性を養い、将来グローバルに活躍できるビジネス人材を育成します。

グローバルビジネス学部
ビジネスデザイン学科
会計ファイナンス学科
学部長 今井 章子

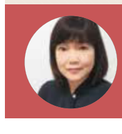
伝統と現代をつなぐ 人間文化学部の学び

古くからの伝統的な学問分野である人文学ですが、日本語日本文学科・歴史文化学科ともに新たな学びの機会を次々と提供しています。アナログ、デジタルを問わず様々な記録を扱う専門職のアーキビスト認定課程や学科プロジェクト、テンプル大学ジャパンキャンパス（TUJ）との連携による協働授業、交流プログラムなど、専門の学びを活かし、実践することで、社会で役立つ力を養います。

人間文化学部
日本語日本文学科
歴史文化学科
学部長 山本 晶子

多様化・複雑化する 社会課題への問題解決力を修得

人間社会学部の４学科では、それぞれ「こころ」「福祉」「教育・保育」「リベラルアーツ」の専門的知識を学ぶと共に、国際交流プログラムや地方自治体・企業との多彩なプロジェクト活動など地域・社会の課題解決にも取り組んでいます。これらの学びを通じて、多文化共生社会における社会的課題を理解し主体的に社会貢献できる力を養います。



人間社会学部
心理学科／福祉社会学科
初等教育学科／現代教養学科
学部長 田中 奈緒子

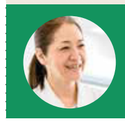
現代の「デザイン」の形を考える

変化が激しく多様な現代に即したデザインの新たな形を考え、提案することを試みていきます。建築・インテリア、ファッション・マネジメント、プロダクトとデザイン・プロデュースの4コースにおいて、社会の諸現象や互いの専門分野の理解を通してデザインの可能性を考え、現代の多様な現象に応えることができるデザインプロセスを学んでいきます。

環境デザイン学部
環境デザイン学科
学部長 金尾 朗

人と地球の健康を守る

人は従属栄養生物です。外界との関わりなしには生きられません。しかし今、人に多くの恵みを与えてくれる地球は疲弊しています。地球と私たちの健康を守るためにできることは何か？　フードチェーンを学び、人の健康と美を追究し、老いや病、貧困と向き合い、ボストン校への留学など世界に触れて見えてくることがあります。多くの知識を基に、考え、行動する人を育成します。



食健康科学部
健康デザイン学科／管理栄養学科
食安全マネジメント学科
学部長 小川 睦美

【テンプル大学ジャパンキャンパスとの連携】

「ダブル・ディグリー・プログラム」1期生4人が米州立大学を卒業

「SWU-TUJダブル・ディグリー・プログラム」1期生4人が5月、米国ペンシルベニア州立テンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ) を卒業しました。このプログラムでは通常、昭和女子大学で3年、TUJで2年、計5年間学び、両大学の学位を取得します。1期生は国際学部国際学科3人・英語コミュニケーション学科1人の計4人です。TUJに2020年に編入し、政治、社会、歴史、文学、哲学などのリベラルアーツを幅広く学び、BA(学士号)in General Studies Major(教養学科)、concentration in Asian Studies(アジア研究コンセントレーション)の学位を取得しました。

日本にいながら アメリカの大学に留学、学位を取得

TUJは世田谷キャンパスの敷地内にあります。コロナ禍で海外渡航に制約が生じる中、日本にいながら米国の大学の授業を履修、学位取得できるメリットがあります。加えて、TUJからの奨学金により、原則として昭和女子大学5年間の授業料で両大学の学位を取得できます。

ダブル・ディグリー・プログラムの拡大

昭和女子大学のダブル・ディグリー・プログラムは上海交通大学(中国)、淑明女子大学校(韓国)、クイーンズランド大学(オーストラリア)とも実施しています。2014年度に始まった上海交通大学のプログラムからは、すでに51人が両大学の学位を取得して卒業しています。

TUJとのダブル・ディグリー・プログラムには、2022年秋からグローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科の学生も加わる予定です。

ダブル・ティグリー・プログラムの5年間の流れ

1年次 2年次 3年次 4年次 5年次

昭和女子大学 → 提携大学 卒業 → 昭和女子大学 卒業

ダブル・ティグリー・プログラム卒業者数と参加者数(見込み含む)

提携校	上海交通大学	ソウル女子大学校※	淑明女子大学校	テンプル大学ジャパンキャンパス	クイーンズランド大学
派遣開始年度	2014年度	2017年度	2021年度	2020年度	2023年度
卒業者数	51名	10名	–	4名	–
参加者数(見込み含む)	38名	※	15名	39名	2名

※ソウル女子大学校(韓国)は2017～2021年度に実施。

TUJとの合同授業「日米写真文化」で活発に議論

昭和女子大学とテンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ)の合同講座「写真の理論と実践―日米の写真文化」が2022年度前期から開講した。

本学の教員を兼ねる写真家シンヤB・TUJ上級准教授が前期は日本語で、後期は英語で講義を担当する。前期はTUJの夏学期にあたる5月から7月土曜の午前、午後に各135分ずつ開講し、3単位を取得する。

前期の履修生は、昭和女子大学生10学科27人とTUJ生7学科15人。授業では写真の理論をともに学び、両校生が混ざってグループを作って写真を撮影し、「日米の写真文化」などの課題に取り組む。

家庭での写真の飾り方、記念撮影や広告写真の相違など、幅広い観点から学生たちが熱心に日米比較について意見を交わした。「昭和女子大学の授業と比べて、議論の場が多い。TUJ生が積極的に発言するので、自分も発言するようになった」と昭和女子大学の履修生は刺激を受けていた。

合同授業は2020年秋、コミュニティアートから始まり、広がっている。

【学生インタビュー】

グローバル教育プログラムで得た気づき

「すべての学生に、グローバルに学ぶ機会を」という方針のもと、幅広いグローバル教育プログラムが用意されています。日本語日本文学科4年生の殿岡万季さんに多彩なプログラムを通じた学びを聞きました。

Q: 多くのグローバル教育プログラムに参加したきっかけは?

A:韓国ドラマが好きで、韓国人留学生と**日本語会話パートナー**(＊1)になりました。一緒に食事に行ったり寮で韓国料理をご馳走になったり楽しく過ごす中で、文化の違いや日本語を説明する難しさを知り、日本語教育に興味を持ちました。もっと韓国文化を学び、適切に日本語を説明したいと、春休みに韓国からの留学生の**ホストシスター**(＊2)となり、2年次4月から日本語教育学を履修しました。再度韓国人学生の日本語会話パートナーとして交流を深めつつ、日本語教育学を実践しました。

Q: ソウル女子大学校やチェンマイ大学の研修に参加したのは?

A:会話パートナーやホストシスターは日本語で話すので、今度は韓国語を学びたくて**ソウル女子大学校韓国語研修**(＊3)を受講しました。一方、**チェンマイ大学ビジネス研修**(＊4)は海外大学の教授による本格的な英語の講義で、SDGsがテーマだったことに魅力を感じました。オンラインとはいえ両方の研修期間が重なるので迷ったのですが、思い切ってチャレンジしました。

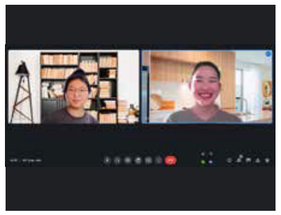
Q: 2言語の同時受講は大変そうですね。

A:研修が重なった2週間は、午前ソウル女子大、午後チェンマイ大というスケジュールでした。ソウル女子大はほぼ毎日課題がありましたが、3コマ韓国語を聴き続けて質疑応答やディスカッションをすると耳と頭が疲れてしまい…。結局、チェンマイ大の講義後、夕方以降に課題に取り組みました。

チェンマイ大では、SDGs12番目のゴール「つくる責任・つかう責任」がテーマでした。実例を中心にした講義はとても興味深く、目先の利益だけでなく、長期的で総合的な視点の大切さを学びました。講義後に隔日で現地の学生と会話を楽しめたのも有意義でした。最初はタイ語の発音が残る英語が聞き取りにくかったのですが、向こうからすれば私の英語もきっと同様だったと思います。

Q: 3年後期にLEPPに参加したのは?

A:ますます韓国を理解したい、せっかく学んだ韓国語を忘れたくないという気持ちが強まり、**LEPP**(Language Exchange Partner Program＊5)で淑明女子大学校の学生と週1回ほど、韓国語・日本語を交えて話しました。両国の歴史や文化のこと、いま考えていること、将来のことなど、日常会話にとどまらない深い話もできました。プログラム期間は終了しましたが、今も毎週オンラインで交流を続けています。



▲LEPPのパートナーとなった韓国・淑明女子大学校生と。尊敬できる人です。

Q: 多彩なプログラムから学んだものは?

A:日本人同士の交流では得られない気づきが多かったです。日本人とは、日本語とは、日本文化とは何か。それらが世界からどんな見方をされているのか、外側から見る習性が付いたように思います。これから私たちはさまざまな国の人と一緒に働くことになります。相手のバックグラウンドまで理解し、協働できる道を探れば、お互いに気持ちよく働けるのではないかと思います。

参加プログラム

＊1)**日本語会話パートナー**: 留学生とパートナーとなり週1回程度会って日本語で話す
＊2)**ホストシスター**: 留学生の円滑な生活をサポート
＊3)**ソウル女子大学校韓国語研修**: 3週間集中プログラム。2単位取得対象。全学科
＊4)**チェンマイ大学ビジネス研修**: 2週間集中プログラム。1単位取得。全学科2年生以上
＊5)**LEPP**(Language Exchange Partner Program): 海外協定校の学生と毎週約1時間、言語や文化を学び合う

「S-GLAP」で全学グローバル人材を育成

全学でグローバル人材育成を推進するため、「Showa Global Liberal Arts Program(S-GLAP)」が2022年度から始まった。留学がカリキュラムに含まれない学科の学生を対象に、グローバル社会で求められる語学力・知識・マインド・スキルを4年間を通じて身に付けることを目指す。

一般教養と学科専門科目からプログラム対象科目を選定し、世界の諸問題とその背景にある文化の違いなどを学ぶ「グローバル基礎」と、それらに基づいてグローバル市民として国際社会で活躍するのに必要な知識を学ぶ「グローバル応用」を科目として体系化。さらに、昭和ボストンへの渡航やオンラインプログラム、テンプル大学ジャパンキャンパス(TUJ)を含む交換協定校への認定留学や言語交流プログラムなど、幅広くS-GLAPの参加ポイントを設定した。

授業と留学や海外研修の組み合わせは自由で、「通常コース」は合計20ポイント以上、「Advanceコース」は合計30ポイント以上を取得する。語学力や成績の基準を満たすと、大学から修了証が授与される。22年度入学生からスタートし、22年度前期から30人以上が参加している。23年度以降は1、2年生の募集期間に登録して参加する。

【ゼミ紹介】

海外に日本を発信する英文サイト「Palette」を運営

学報委員 井上 由菜

ビジネスデザイン学科の今井ゼミでは、2017年度から「Palette」(パレット)という英文記事サイトを運営しています。このサイトは、海外に住む学生や社会人の方に向けて日本についての情報発信をすることを目的としています。サイトのデザインから運営まで今井ゼミの学生で行っています。

今回、日本企業の「サステナビリティ×地方」という新しいテーマで記事の執筆・デザイン改訂を行い、2022年5月に公開しました。現4年生は、このサイトのリニューアルのために21年秋から活動してきました。

まず、日本企業のCSRについて学びました。CSRとは Corporate Social Responsibilityの略で、日本語では「企業の社会的責任」と言われています。本業を通じた社会課題の解決や社会貢献を通じて社会からの要請に応えることが求められています。CSRについて理解を深めるためCSR検定を受検したり、記事で取り上げたい事例を各自で調査しました。

次に、英文記事の基礎について学びました。欧文の書体には、「フォントファミリー」のように選び方や使い方の独特なルールがあります。こうした英文記事執筆上のルールやフォーマット・デザイン等を、ゼミの時間や外部講師をお招きして学びました。また、記事の内容はそれぞれが調べ、英文にまとめました。メンバー内でお互いに書いた記事をチェックし、先生に添削してもらいました。

サイトのデザイン改訂では、ゼミ内でサイトのコンテンツ構成等を考えるサイト構築班、新ロゴ作成班、写真・ビジュアル素材班に分かれ作業をしました。担当者たちのコメントは次の通りです。

全体統括リーダー: 庄司 彩佳

作業が就職活動の時期と重なってしまい、オンライン上での作業が多くて大変でした。そこで、1回のミーティングでより効率的に作業を進めることを意識して行動しました。忙しい中でも積極的に協力してくれたメンバーのおかげで素敵なデザインのサイトを完成することができ、とても嬉しいです。デザインだけでなく、記事も各自で調べて英文にまとめました。ぜひ、読んでください。

サイト構築: 吉田 柚風

見やすいサイトデザインを意識しました。トップ画面をスクロールせずに情報が一目で分かるようなデザインに仕上げることにこだわりました。また、サステナビリティ×地方というテーマに沿って、和柄を使用し、SDGsカラーを取り入れたことも特徴です。

新ロゴ作成: 岩元 美侑

サイトのテーマが和柄×カラフルだったため、麻の葉文様をアレンジして日本らしさが伝わるデザインを作りました。さらに、ゼミのメンバーが7人ということで、ロゴカラーを7色にし、ちょっとした隠れた意味付けもしてみました。

写真・ビジュアル素材: 井上 由菜

サイトのホーム画面の写真を担当しました。日本らしさを伝えつつ、テーマの「サステナビリティ×地方」を意識して写真を選びました。掲載する写真は、ゼミメンバーが各自で撮ったものから、ゼミのメンバーで決めました。また、トップページのキービジュアルとなっているイラストもメンバーのオリジナル作品です。

初めて英文の記事を書いたので大変でしたが、とても良い経験になりました。サイトをぜひご覧ください。

https://www.palette-swu.org

【イベントレポート】

「知ろう!自分の中のアンコンシャスバイアス」に参加して

学報委員 池嶋 透子

学生と現代ビジネス研究所研究員によるシンポジウム「知ろう!自分の中のアンコンシャスバイアス」が4月、対面とオンラインのハイブリッド形式で開かれた。

「アンコンシャスバイアス」とは、無意識の偏見や思い込みのことである。自分の中のアンコンシャスバイアスを知り、克服することは、どのようによりよい社会・暮らしにつながるのか? ①学生からプロジェクトの成果発表 ②社会心理学者・北村英哉東洋大学教授による講義 ③参加者のグループディスカッション、の構成で行われ、最後に全体で共有した。

テーマ別プロジェクトの成果発表

【広告・TV・企業活動グループ】

近年の脱毛に関する企業(脱毛サロン・クリニック等)では、体毛の嫌悪感を煽るネガティブな広告から、脱毛意欲を掻き立てる広告へと変化している。一見ポジティブに思える後者の広告にも、体毛がない肌=美しいというアンコンシャスバイアスが潜んでいる。

【おもちゃ・色のグループ】

小学生以下の子どもを持つ保護者へのアンケート結果を発表した。①青色系・ミニカー等 ②ピンク系・人形等 ③黄色系・積み木等、の3つの選択肢から自分の子どもに購入したいおもちゃを選択してもらった。その結果、女児の保護者で①、男児の保護者で②を選択した人は少数で、男親より女親の方が③を選択する傾向があった。

【生理・性教育のグループ】

海外の性教育事例に関する調査を行った。日本の小学校では女子のみが生理について教わるのに対し、スウェーデンの小学校では男女共に学ぶ。このことが、日本における性へのタブー感を作り出し、アンコンシャスバイアスを生み出す一因ではないかと指摘した。

みんなが住みやすい偏見のない社会

成果発表に続いて、北村教授はアンコンシャスバイアスを「行為者本人が意識せずに行うことにまつわる歪み」と定義し、議論を展開した。遺伝子的には「女性は理系が苦手」というデータがないにもかかわらず、理系に進む女子学生の割合が少ない事実を取り上げ、ステレオタイプ・偏見・差別といった言葉の概念を区別した。即ち、性別等の集団カテゴリーに対して抱く典型的な認知をステレオタイプ、ステレオタイプに付随する感情を偏見、それに基づく行為が差別であると説明した。

北村教授の講義でアンコンシャスバイアスを克服するうえで特に重要だと感じた2点を紹介する。1点目が「システム正当化理論」を解決する必要があるという指摘だ。自分が不利な立場に置かれたり、差別を受けたりしても、それを当たり前であると正当化し、受け入れてしまう心理のことだという。

2点目が、偏見のない社会は住みやすい社会という指摘だ。女性の暮らしづらさを改善することが、男性の暮らしづらさの改善につながる。マイノリティへの理解が深まれば、全員が生きやすくなると強調した。

発表と講義を受けて、グループディスカッションでは、シンポジウムに参加した異なる世代・性別・職業の人々が意見を交わし、気づきを共有した。北村教授は難しい問題を諦めずに考える姿勢や、考え続けることが、人のためにも自分を成長させるためにも、最も重要であると述べた。昨年6月からプロジェクトを進めてきた永合由美子研究員は、次代を担う今の若者たちが、子どもたちのロールモデルとなれるよう手助けし、自身も歩みを止めず、学び続けていきたいと述べ、シンポジウムを締めくくった。

【先輩に学ぶ】

国際学科主催内定者報告会

学報委員 髙橋 未優

学部学科ごとに先輩に学ぶ機会があります。国際学部国際学科主催の内定者報告会から独立行政法人国際協力機構(JICA)に内定した国際学科5年(当時、2022年3月卒業)吉田安里さんの事例を紹介します。

吉田さんの話

ダブル・ディグリー・プログラムを利用し上海交通大学に2年間留学しました。就職活動は3年次4月からエントリーシートを提出し、準備段階では2年次8月より就職活動に向けたインターン、留学中の3年次7月と12月にも海外インターンに参加しました。3年次6月から内定をいくつかもらいましたが、就活を継続し、4年次8月の3次面接で縁のあった現在の就職先に決めました。

就職活動が非常に早期化、多様化しています。インターンからそのまま内定する人や3年の春に内々定をもらう事例を耳にします。そのため、早くから就活を始めることをお勧めします。

自己分析の深堀が大事

面接は段階によって内容が変わっていると感じました。1次面接では人柄を確認するため、学生時代に力を入れたこと、2次面接や3次面接では会社と自分との相性を見極めるため、業界、企業、職種の志望理由についてより細かく聞かれました。

成功談は、常日頃から目的を持ってチャレンジしたことやインターンなどの業界、職種理解などです。コロナ禍になり、友人とオンラインで情報交換やオンライン面接に向けたカメラの写り方の研究をしたことなども内定につながった要因の1つだと思います。

就活において1番大切なことは、自己分析の深堀だと思います。私は次の3点を大切にしました。**・being= どんな人間になりたいか ・having= 何を手に入れたいか、自分自身の譲れない条件 ・giving= 自分がその会社に入社し、何を社会に還元したいか** ということを考え、自己分析をしました。これに沿って考えることで、面接でも筋が通った一貫性のあることが言えました。

就活の失敗談は、志望業界を広げすぎたため、準備が大変でした。webテストは種類が多く、対策不足で失敗したことがありました。

人生の目的を考える

今やっておくなら、人生の目的について考えることをおすすめします。20代前半の好きなことや興味は実は大事で、意識してみるだけでもアンテナが広がると思います。具体的には業界地図をみたり、新聞を読み記事について自分はどう思うのか考えたりするといいでしょう。また、本学のメンターカフェなどを利用して社会人メンターの話を参考にするのもオススメ。就活を始める前に、時間があればSPIやwebテストの準備、検定の取得(言語、簿記、免許)などをしておくと良いと思います。

就活では本質的な部分を大切にして欲しいと思います。自分のキャパシティを超えていっぱいになったら休み、無理に自分を追い込まないことが大切です。就活は楽しんだもの勝ち!夢中になれば結果はついてきます。

2021年度卒業生の実就職率* No.1 94.5%
全国の女子大学「12年連続No.1」
＊2021年度卒業生の実就職率(実就職率=就職者数÷[卒業者数-大学院進学者数]×100)
＊卒業生1,000人以上の全国の国公私立大学(大学通信調べ)